

風能

柳多留

三入編

1147
37



門へ 9
1147
37



東部子柳風の初向筆
 下谷小石川鞠町の倉八
 月子向存千余頁を括く
 うつく今三木の秀逸を
 の以筆三冊に七九ハ
 志子あ年れ中の世八編
 を著しけの世にる卯子
 著法を編めし
 書中裡述

大正...

カテウ評

採女をカテウ 四馬を後部上
南女子二面墨くぬき下一
積こー、橋のうわくおうけの
鳴ハル百活能ハ九百なり
掃海の中カハ下りるとこもなし
新道さだけ子中絶をどうも
まぶさなりやせんつめたハ笑て原
津渡のづつこの夏子出カカ

所世し

春功 南風 振袖 香気 色多 玉季 南風 深紅

をぶし女子はぬき下りてをさけ
出依をゆかりとありくうけ
黒髪をさすうら黒く織はらぬ
正直のうづ十舟かきくをり
姫ごんの中カ一名馬ハ名をのじ
法草子橋保川子いづか啼
三井寺の鐘成世のう下一
日本の風ハ異国く名を以て
仲人ハ名を干正ころすなり

若菜 女子 川市 井丁 新る 担巻 卜丸 必産 無言

十
カテウ評

ころどこハ指ありりるいおや
 山吹の故子ハ澄まーのこさき
 市尾翁上翁もゆがかたあらん
 三尺ハ大ぶせハ尺大のまはり
 白宗の玉ハぬま才の山ガあま
 を神主の勅らしーい 物 諸
 万古子すくねくまれを諸の氣
 日本をさるる二人りく掛玉けり
 かさサア毒あふさささ母は信り
 柳世し 二

宗子すくねね流新くたぐまね
 整玉子とまんをませりも物の子
 白宗翁の田だん他家の手はかり
 手を受けハ蓬浪山のこさくへん
 名相をらわが経軍の道中記
 小信うねが手紙のそこを志す以
 餅の礼大きく耳のそぼぐまひ
 志希くたねくもあまハ弁ま
 鳥つらくくく標る中十ハ
 松宗 宗徳 初文 矢正 古志 浪文 矢正

此屋脚をのんく祥ハ瘡を下ケ
兵衛の志をくくらの有る華田山
玄たるよ古襦袢がうりくし
兼舟子らふのが本の三ツ前子
吉の子の悪い氣まがどがり
丈長の沖志屋をやりこめる
七つうら吉人玉の毒不ある
乳毛の赤踏爪を禰ろくあり
兄の尻妹の扱を母ねらひ

抑世し

門柳 柳島 吉茶 加文 里柳 井子 玉季 春府 学人 三

此後美が涙と幼他ハ母が
大いそろ尻の尾をんせぬ有程
升るのたらん汁をこぼし
ふざいといの門あがききく尻を扱
おまやらくの苗あちこちある
舟と舟後手カヤカ馬四りかね
法け子坊のこころ月かぶりの
帝をくくくあし師をくくあし接
とけらるるも黄ごりか成る酒白

埋免 二町 又又 井子 如雀 志又 華山 吉飯

一十一
大
知

生揚ぐやまの八もやるとうちんや
 南人の泣あすやうな河東が
 年のまいた路君に多く汗を割
 道鏡ハ猿人靴もなごつとひ
 戸までいをするる先がたたく
 及流が舟祝虫のせりのこま
 とりがうをるく老子昆布す
 三冬の中布むけへのまぬぬえ
 ト丸
 運書
 去者
 道人
 真境
 門柳
 三朝
 三冬

九就評

柳世しに

帝ちるね津のつまめもそく
 三子ふへ千重のふろをん志やうさ
 名の志れね様り千の集入
 浅岩ふしりくけむらハ作以山
 山吹の海ハぬれまーそのとら
 堪々の酒を煮酒すりくけし
 山系の子子ハ埋つとるーん
 だうすけをのんく群ハ疾を下う
 四天王一人ハ紅雲を根こまひし
 羽織
 五町
 嘆号
 門柳
 三朝
 三冬
 三冬
 三冬
 三冬
 三冬

二十
 大
 小
 大
 小

孔がさきさうしゆたん布よぬれ
 後解と涌るつとする種英一
 束のかさあり名のきい江の強
 高やまことんごらやうい七ト八
 沖江月影のびるあ大作
 笑しりくさうねる橋のくく
 うすもくかハをわらあうい
 停正へおきの採はまこ折り
 衣笠のあ峰ハ百七年め
 柳世
 玉季
 懐
 直
 志
 柳
 二
 無
 柳
 柳
 五

三枝のれをお念くまらざし
 本後の利左衛門ぐちぐち
 一丁の山ハきれいよ心あし
 西直のやあぐ十月からくある
 おお入り重をハ谷ハ捨らやう
 舟笠の内ハ十早のあやそり
 仁あよちのあも娘の海刺ま
 隣のれ大きく耳のまけて
 笑さうあまのねハあえ葉
 笠
 竹
 府
 五
 水
 里
 糸
 古
 笠

二十
 大
 七
 十
 一
 二

つらとて子修の手を引以て
遠求を多し一魚くつて
日メ子堂岩の歌をひか
梅のそり梅よとて快気
梅もく曲梅の歌をひか
中角くか巨梅の歌をひか
玉子疾つげく一魚くのんく
郷細結く者つて玉子あり
西至ハつて方ハ舟くつて

柳世し

一徳 玉季 マ支 四溪 海客 森下 石橋 唯小 可高 六

幼年の日く未を席う梅く
梅く梅く梅く梅く梅く
三韓のた梅子の屋を
おすくが里ハ舟くつて
一寸よあるめを二つ出
三つちハ舟と舟廣と
おすくくの梅梅梅
三人ハ火防ハ火の迫り
十六夜ハ秋又ハ山の

松里 眞殿 松山 志丸 甘高 柳馬 山産 若知 嘉壽

十
か
か
か

まゝの角をかるゝ〜〜〜
あ〜〜〜〜
か〜〜〜
馬〜〜
追〜
馬〜
前〜
ま〜
馬〜

山馬
川柳
兵庫
馬子
松山
松柳
松石
有風
七

カの内ホリ〜
神生丹を〜
大食も〜
花あ〜
諸候を〜
とが〜
袖なり〜
茅子〜
信玄の〜

夏
振袖
分多
羊山
三乗
常言
寛政
南風
無言

二十
廿六
廿七

おめつこのさきしりて声なき
 得うとけくらんさの梅があれ
 こんがうがおぬも門をあたると
 去る心なく思ふ事の甚あかる
 何とそををををををををの舟
 旅賃いふ朝は毎さとう人市賣
 女座よりこぼるまよはしきま
 本琴のやうにまよふ地やうに
 上下の梅はまうり不二の山

節北し

手よまげらうりもせつちい満
 午の日念ハ海をく潮を釣リ
 物さしをやつとこりくを筆
 つもくとあさ日程の中をひき
 百歳（所用のたのむ年好休
 浅草子嶋川子うらうらなく
 持系を小石割子するこかん
 何うあつたけの松へ花がのり
 月年あんがうはの端あり

松山 有幸 朱笑 終焉 志丸 押巻 門柳 夫境 吉鳥

三十一
 廿六
 廿七

手こし子二豆の柳子もたす
木戸おくすう雨くまゆん
七月半のよたれうろをある
柳子をまじひんち法由集

川柳評

吉吉例寅の影へ介をあら
涙のうゝ道徳れなへ山云
左様なめう子とんをちぢ人
清威名はけ松の厚子うぢ

窪谷
無人
柳雨
集

和里
柳月
山
力高
九

柳世

細くら矢ハ鳩のあんだけ
もる机の皆かしこまるあひぎえ
言いし五十四五里に連辞り
通一矢の巻ハ此方のる野あり
こんが産かんあうほあお場
牡丹城の中子詩ん
宝舟ごふくや二の空ろく飛ら
大津業柳子とたらハ伝道あり
ホ五をこへづく路を生ののひる

スメ
里
柳水
玉子
カ
和
如
漢
未

三十一
廿六

塙ハ舟崎ハ流中うらりし
 島ハ地もかく酒もたまやれる
 父也のはちまきなをやりある
 字あつく正しく書ハまじり
 新づくくきりくもめる中十日
 十六夜ハ秋又小まの宮中ん
 正しく書ハ秋のまじん
 蒼然が知あく世果の帳あり
 東由の風をおしこちく

柳世

里松
 門柳
 休子
 志水
 天正
 正徳
 水戸
 墨江
 十

位達候くあるるこがきり
 翁おへ満路テ珠をりりま
 湯のえ流を我地おく返る
 書ハ八百餘施ハ五百ちり
 五十五石こりりたうさん
 門流書ハ婦たまんりやどみ
 ゆるりゆるりこ流の解りや
 幼うつは着あつらんはれ
 こハつらハ古さの楽やちり

住進
 筆山
 香貞
 水花
 孤雲
 末学
 仙舟
 里柳

三十三
 廿六

三十三
廿六

目つらしく因はあまのをさる
切半をけりありまき困れり
少流ハ親父のげせぬうみ
本戸おとくちりくきあ
現ぶこ下戸へさるる連ある
酒かつく履を切るる鼻は
市近ハ梅やの葉あてこあり
おすてぶさるハきんこーに月夜
久米の平岡ハ秋づくり依り

柳世

土山 志丸 松山 柳林 海人 北花 森鳥 志曉

啼ぐやちりく崎子けいごなし
土佐約子海東青ハのりぬん
生マ場くむるのハ流めさるあや
げちな月福利の官同く
たすけらちころはもまふ二頁
十あまちりく老歌鳥をうち
樹老鷹子候やの千種巻をかけ
吹けハちあやをまをばいこ持
心ハ解をすけあつーいこ大い

志夕 白免 ト丸 玉手 暮庭 大石 志丸 三不 密写

先でいご子をとてハニ年思以
 おてんばまかまひなんあてんばま
 けいあうまころ押もある跡と
 母さじも孫もも孫孫中りおね
 初年ハ帰も赤のめしをたき
 せおませうり絆のたぬをほし
 ちとどくだむ存てか弁まハ弁ま
 加やハ七もこれんくれとせうと希
 病書とばかねやま娘まこ人を賣り

柳井 十二

門柳
 千誠
 市兵
 赤夕
 市兵
 吉鳥
 浪文
 加文
 松石

人馬を女り子切くニ集まうり
 りあれがき島の汁を指ますり
 糸のきうねるぐん月義再丑
 まや夫人うらぐんあふひがひ
 ありまのうらぐんあふひがひ
 おまこくえり掃くえりまそこせ
 ちの下のタモウくこりく下りえ
 手さすげりありいせあまい瑞雪
 海辺どのこせとの子息くせとあ

柳子
 墨塗
 義兵
 志丸
 市二
 市兵
 加文
 松山
 市子

三十三
 柳井

三十三
柳世

柳の下へ 柳垣の並をつける
帯をいぬ 五通子すりのふくさの
百粒ハ一と云ふのおもになり
丁百のころち(官守)かきへらみ
お糸を小石割すすりみりんご
車とが房の(お)男と梅子着
はあふ持をつへ(お)はしりとも
おまら浅下甘徳平子入れよる
つるの皮ひんむくおすいせじん

浪文
伊達
五丁
噴鳥
川柳
九折
舟里
伊達
おま
柳世
十三

中華のナリ(お)の漢もあまらず
お(お)生野を切らね(お)あはすり
下中(お)出(お)より(お)んれ(お)あま
餅(お)つ(お)ん(お)つ(お)く(お)む(お)り
お(お)の(お)ね(お)ち(お)り(お)な(お)つ(お)る(お)ん(お)ご(お)り
お(お)ち(お)ら(お)な(お)ん(お)も(お)あ(お)ま(お)を(お)つ(お)ま(お)い(お)し
帆(お)は(お)し(お)ら(お)相(お)持(お)ハ(お)み(お)を(お)ち(お)つ(お)る(お)ぶ(お)せ
川(お)紙(お)の(お)へ(お)子(お)が(お)え(お)ん(お)ご(お)あ(お)ん(お)ご(お)す
乳(お)母(お)が(お)投(お)げ(お)る(お)風(お)倉(お)敷(お)を(お)あ(お)し

夷徳
孤雲
夷徳
漢池
志麻
さい
舟里
伊子
里鯨

市風評

清麻子子風もあらぬ代に案
梨の本の木く冠ももつと案
浮刺の儀を費く候子つま
泥のつゝ此のこゝへは清所車
切抜をやめくえく形うつゝ合
むよ多の左をハ籠考が候あしへ
深とて子持仕立やちをつけ
口よこゝとつゝまへ初加つは

柳世八

柳多
赤柴
某儀
市東
瑞多
一徳
志丸
赤柴
十四

い濃があつゝ三人玉の楽
細と田く左のぬれる案と案
小役をや送り子子をこし
几組子あつゝ女席もあれの因
ねんほくく年が乾の氣を所
深本をうすま連てえいれる
茶飯りすぎく候切がら色きう
費く来ん因ハ二所んく深く飛
津代子といせやハ甥を妻子なり

里花
志丸
鯉角
青枝
枕林
門柳
ハ
井子
草妻

九三十一
市風評

あざきををじくまのあの洞子に
月あめがねをい入をまゝるあへど
人ねいれとよあはねを我に叶し
楊子妃も小町もいづれまの王
かゝをみよ垂しく怪ひをを通
ぬの笑日なまへたりひでま
夷も本朝朝ちるび根と候
あひあすそをれ月も松が島
ルツ橋の流のすへらるをまき

柳世八

志夕
今夕
赤木
里花
惠柳
門柳
青板
十五

町の名もあなともまよ縁あり
外しく名のきいあやとまの足
へいけいをやめよ志やれと親父い
浪人もあやの母だけ子種いつま
日本へひびくハ籠のそれとあそ
門あへみの市のたつ西も猪を
蝶をの飛んぐ火も入年月や
志うれと下女提立のにまやう
新子傘あれどもむくくちう

一梳林
里花
赤夷
赤鳥
志丸
千夜
海鳥

三十三
新子傘

を食の中にもある二はしら
いふも嵐のきも 海坊子
あふなさい神恵をむく松子菜
百敷目い何をかきさう覚がほ
付るがてんかん病く運のよこ

伊達
有幸
青枝
杯美
加太

瓶声評

日本へ流の帆ハ遠もたさず
その口すれするも目おなる老の杖
合戦ハ字流の管くアムり

一徳
ト丸
一徳

柳世八十六

橋咲山へ免の致生今
漆あけさ子持仕立や乳をつけ
甲子よをれ事すよこ橋大工
鏡ぐさ之鏡がなけれあくされ
横ふより下共小神よまのい子
あは月子梅子つものささかちり
ぶこおてハ成子をふやす由家
大木子まうねといへごこ三ヶ四
角の笑日か中へ写り以寺

市風
志丸
市風
" 市風
西丁
喜枝
三乾
門柳
鬼柳

三十三
三十三

町の名もあなともまよ子縁あり
大為子おんあぐさちねけあり
小原女いつりく牛の脊をたすけ
馬も舌はおよばぬあひりくける
舟のね植くなまらふまのこす
名はしの子はこんがらばはる
のてらつて蛭刺を餌サを釣
紅の舌く釣下弦なめるなり
以うてく東急およる満のさ

柳世八

十七

柳林
豊柳
名及
亦乐
海人
今多
三乾
吉笠
百且

やまめーをこつ我文あつづー
仲の町様まけね柳こー
つまがーの系子縁あ仲の町
後帯をメると親のまらゆら
大いあ縁法女子歌も赤く舞
後教先子札をかりる空らん坊
極らんいすり跡くあすこりけ
ぬけ系りかや物八の中こ藤く
音ものーめぐ地あるかやい急

亦乐
加丈
一徳
振袖
柳林
其茂
有幸
市風
志丸

三十一
柳世八

小使をり道より子なりし
およけし人をのせく同や加こ
茶種やいさおのあつ生をえ
早川へ馬をのあつあまあ
妻はまけくあつこのあつあつ
はんだいへのりても下あつこ
おつあつあつあつあつあつ
つあつあつあつあつあつあつ
すまな下あつあつあつあつ

柳世八

鯉角
有車
升子
一徳
加太
志水
一徳
柳柳
耐夕

乃男ハ大服ていあつあつあつ

川柳評

赤殿山若あつあつあつあつ
あつあつあつあつあつあつ
合戦ハ字流のあつあつあつ
小牧山あつあつあつあつ
あつあつあつあつあつあつ
三丁のあつあつあつあつ
あつあつあつあつあつあつ

升子
志水
一徳
志水
志水
志水
志水
志水

三十一
井ノ口

やま児一を養育しつづつづ
をいぬまををえつゝハ旗切共
鯉くえ親がなればやすくされ
夕立よこまろく下戸も十二文
去来ハまゝえよころぶこころなり
やうぬまづぬちこ女座も小端立
たごごやの草摺川きハ七ツる
かこ一たぬ敷も持をたづね
徳保ハ十六七よ志先られる

柳世八九

人目ドかゞず系瓶をびんぼ持
武士の毎々あつハ遠方なり
鈴かへりもりやはどあるとあ隣
へいけいをやめよ志やれと親又
川紙一ハかゞずつゝこ口もてる
小使をかり送く子をりナ
罽丸をつりかゞすも志ちり
赤新堂所もいんねを隔来させ
はよごしといはるゝ初妙の母

一徳 林二 仕町 京美 志水 鯉角 柳角 赤新 亦乐

九三十一
「廿六」

九三十一
三十一
三十一

仕立やハ城へつけりそいめ身振
立白ハあるく子持ハかんがすり
彩及くえなとすかほの編くまき
小侍をまりはじめはうばが池
あついでれらハ神のほまきいこ
玉よりも女希のなみこまを
つまらるがてんらんやみぐ運のま
こ運もくあつてんらんハ底のごん
城中ハだるが城ああまりあり

柳北八北

五人 射夕 井子 姫小 斗丸 姫小 加丈 一徳 亦赤

たんへいさそくごらね彩道堂
増上ちこちあさんこ下女とひ
やあを希むとれこやつハかづハ老
二人杖持しやうにん形ハの儀へ
百按目ハ何をかくさん堂の目け
目ハめがね違ハ入をすくろるあへて

壬生 不徳 分多 志夕 志夷 今多

里産坪

赤麻子ハ天子加やま地なびま
 地をニツととをどぐひうく
 水子縁あつて浮木の内縁上
 花無の信ちふしを乳母ひら
 本玉ハ丸無江戸ハはほか
 急(ん)子鹿ハ千里もあがひうり
 島原(あ)ハ利にま茶花の子
 大妻く相をましま子織(は)

其笠
 笠山
 香貞
 一徳
 梳林
 カチウ
 加犬
 柳世八廿一

祝ハ幕推の實く簇をま
 清子のこし硫黄のちる附本
 かくく(と)第二人名をのこ
 清主人を二人くくをある世帯
 本火土を運あり女房がえんま
 初漢の出世縁をうち縁を賣
 内建立おどをばありは漆塗し
 内願ち妻の毀を秋あうべ
 猫の眼を耳卦子まふ村妙匠

一徳
 梳林
 依邊
 三枚
 海人
 井子
 〃

大正十一年

元人と化しゆく衣の帯を解き
加のうれさ下ゆハ唯地く結々獄
海有るけいせい如象かまのたを
ふ火を爰以日がれろく
舟代の人んそり代に又入り
老がれの鐘適日疎さ方をやの
又ハ母八年ハ海ハまたをこ
至話の拙子ハ牡丹をこハへハね
水縁日すがほくまらも名子

柳世八七二

井子

在鳥

柳林

美人

柳鳥

在鳥

柳林

在鳥

才丸

三回を魚しよきく番生め

柳柳

楓声評

還迫力ををしろくは凱陣
近江うら瓊河へ流る結がし
淡粧がをよぶこ有へ吹もに
雲水の庭まゆく世里に才
象子産す津もか鼻があいん
舟の矢子五百てつやう珍藤山
島系へかへハ利はな名あの子

カテウ

玉季

門柳

矢正

市風

里産

カテウ

九三十一
井柳大

切れきりなぬきうたせり 網を力
らしきりハ伊崎も難波も同じ声
八丈の志まかれゆくいぢりもく
糸の断たしうなるこく上り下り
孝じこぶ孝裸く好子喰れ
孝じハ高くと不孝ハはまるなり
黄子あり府をき子ハ黄くくぢり
淡州のた木を布こを布毒
正字も村人黄つけり 福松色

亦牙

柳島

海人

市京

三枝

橋袖

中妻

亦牙

かーい浅びびりつうくく後揮し
かろくと第ニ人名をのこし
孤るこすも情事政上手なり
草摺ハ五希磁ハ世希なり
かろくハ表持のする情の紐
千子中くろじ出めらを追らじし
掛をのるな系リハはじを投げ
惣仕着やうく肉ハれをほり
兎子遊れ敵軍のこくちりえ

一徳

門柳

海人

亦牙

加丈

柳島

有幸

十五

九三十一
井ノ大

帆柱子賣く一村日子やけり
 横丁へおれん今くゆく囀の声
 蚊高賣ハなぐり紙俵ハセリ共
 様一ツたのい子番修を事すり
 有殿のゆげがら奥く持く座
 上り殿共ハお利な致ごころ
 古今斗縁のあまハ向い合い
 宗桂子まげこぼほしカハがらん
 笑言付カなく又鼻くハ板を入り

柳世八廿四

者次子系物をとるるへいぬけ
 一多く方の徳をおくり
 新平二つづめての中子土を坊
 度遠をもとていらせりまぐり
 重宗に叔母平ラの相合ん
 右巨ハ極に捨ての下子信
 継ッ子ハ極く首く母く啼
 あんこりやんやんねん西白イ
 らんびんを胃ぶのドの記を道ひ

松林 三郎 二枝 志水 东夷 松柳 里花 千恵 志水

三十三
 三十三
 三十三

川邊の霧く舟くづるたまをやり
 ぶちらでも芳老とゆきお貴
 君臣のたゞく二八子田又ん
 石実の梅ぐ旅やハ陣をとり
 彩者を賣るハ他家の地の因
 弁まも陰こ巨魁ハ今よあり
 弁まハかけく笑てもつよあり
 韓伝よ二歩ト一本のたかせ
 海んくよそるはこる祝貝

里雀
 石袴
 佐小
 志水
 於柳
 佐丁
 三郎
 東夷
 射丸

柳世八七五

大矢ぬおこがのへく中なるをり
 仕又せまやしのよ海を名を付る
 三回を追一よまつて千箇をめ

古鳥
 海人
 於柳

川柳評

深花をり蝶をり是ハよい未夏
 此茶壺への光るハ字詠の二重皮
 五百挺まん海このる赤紙上
 びび足へうり香のすも放坊
 北巴の二ツハ娘のりかじみ

二町
 里雀
 海鳥
 川柳
 鳥柳

九三十一
 川柳評

お塚十二子風氣おこぐなし
 有幸
 くらりの子ハ三人とせいふ 有老
 有幸
 ぢゆ海八日本石の極ごころ
 有老
 日本路手代をつれハ武者も有
 矢心
 美事とあま子なるはづろー
 柳林
 大坂の目費ハ又とないかそこ
 雨父
 行縦子なるつとさるカ從治
 花道
 山母ごな海をのつハ疎後へ
 雨父
 不老不死始皇持業ハ臣意
 亦亦
 柳世八世六

おいものぶが毛傑いぐまは疵
 振袖
 いづつをきしかけしを流
 柳
 四子子をのせをさる中右をく
 柳
 まついのくまをくをのつけ
 一徳
 府かきりたをきく武勇坊
 香貞
 加賀土産する日私を志すんを
 其望
 うぬをれをやめればお惚人ほ
 マイ父
 笑も覺もさるくは捨く返
 香貞
 鈴加へり目のあぬ程子母あり
 雨父

九三十一
 三十一
 三十一

本國ハ丸龜江戸ハ好シ海
かけえのるな糸ハゴトを善
猫の目く時を斗ハ村沙面
さる時ハ曆ヲなんのさたもほし
たぐく入秘ハいの子仲人善れ
因換ハ善も地面も善ぐくく
手指ハ五糸濫ハ巾糸く
い善く糸あすやのハみくく
孝也ト不孝裸ぐ故より日れ

柳世八七七

せひもなくあつゝを善く娘がつき
一人の老女ありは世の蠅をつり
きるこゝろ老女あひを善くする
川中善ハ藤く居くすくたまを善
手のひらをにぎるくはむ善
信善ハ善くく立れずとくく
熱仕善やぐく因へれをより
信おれくタアの糸を善く二ま
人のおもへメ立るかりく

千惠
柳多
升子
市風
多多
市風
美人
加文
三枝
柳
伊庭
升二
里雀
林子
柳多
有幸
三郎
忠美

九三十一
三十一

九三十一
三十一

ぶちくせも芳吉ととけぢく和尙
不徳

丸錦をぬくくんたれはもん公
公多

赤髪公の下女が後ふはよと
ト丸

かけ丸のこしを巻かゝるやの
"

ちへの有るも麻子親父のこまの
"

へんるもなき希川八尾知る
海鳥

轉々子二歩一本をいづて
有幸

えくくられろ二歩のこでも
有幸

二ノ猿へらくがま此邦の六地
有妻

柳世八、七八

まばきりて白加田のあり大さる
海鳥

一トこぐのふのじをおく
三輪

片くハなぐちのすも情の紐
亦乐

笑強くおももさるる端いけ
海鳥

大板の目費子又ト法い
西夕

仔吹山さるわち迷のなく
藻鯉

ぬくおをかいテしくはく
公多

小豆うめあつをふるい
一徳

吹通りのあすは吹ハ
海鳥

ぶちりても芳吉ととけども和尙
 丸結をぬくもんされども人か
 赤糞なる中下女が後々いよと
 かけ丸のこゝを奪おはるやの
 ちへの有るも麻子親父のこまりを
 へんもなき希川は足知る
 轉依子二歩一歩をいづれせ
 不くられろ二歩のこどもゆき
 二ノ猿へらくがま此邦の六地ま

柳世八、七八

不徳

多為

ト丸

〃

〃

海島

有幸

平妻

まばまりと自如のあり大さる
 一トこへぐ油のじをおくゆき
 斤ハなぐちのすも情の紐
 笑絶くおもさるる端いけ
 大板の目費子又ト法い
 仔吹山さるち虫のなく石
 ぬくのねをかいテもくちく者下
 小豆うめ本ツをふるい横付
 以通る子よおす山吹ハ法云ん

海島

三輪

赤糸

法衣

面々

藻鯉

ハ多

一徳

海柳

廿九三十一
廿三廿六

山より方りさうな地之途川
 ぶちあるそづ雷門をぬけしり手
 老の方おかりうららの余振翁
 聖人の世子のりさうあがのり
 女房のらすね婦の行おもく
 中津葉の柏子園をぬきけ
 古今半紙の名本へ向い合ひ
 中津葉の柏子園をぬきけ
 一ノ子よしうける 谷中道
 其成 多喜 加文 林子 射夕 海人 佐小 不徳

併世八七三

大名子結道ち寺よ松平
 ちくちくハ皮道をちうあふらん
 人のもく 寺子如房をたし
 ちう一里ののびるをまとまらんせ
 こらの皮をぬぐ 祇園茶を焚い
 まのちやうと大門たし
 仕送りぐでまきく 産院月を
 中津よしちちよもなるやうに母
 親やのちう子をたし
 位町 志水 射夕 青枝 林子 志丸 海人 三軒

あまの下女様う縁あつさつ三つれ
者や下女あまの仕りて振をう
志つしと加んをあつさつあま
朝日をすめく息をふん流
室の持より縁あつさつ三つれ
婦の志つしと加んをあつさつあま
秋をいふとつた下女は遠
あまの秋あつさつ三つれ
夕日の秋あつさつ三つれ

射夕
糸乃
甚翁
カ
加文
柳井
古
境
カ

御世八世六

大尾
解亦別傳いりの男子婦
目く見く見さつさつあつさつ
る者一みをさつさつ三つれ
糸のどくさつさつ三つれ
産の岡こハけーかつさつ三つれ

有重
振袖
美山
鬼
三枝

息柳評

かちどきをいさぐつら世業嘉慶
以縁女の東下りも漢とこ
為道乾森ハ心まぬ法命日
仙人甘帯ト渡り子くかいるじ
をん志やうさ法をと森地法ん
きー漢よめてく漸をがり勢
里加一り親(も義理の速始×
孔明のあゝ教を指くーめ

柳世八世一

共堂 姫小 折多 百旦 古鳥 林子 上丸 亦宗

吉慶ハ木土モハの合ねちり
千孝又百百毎のあまきうのま
敏上のいさもまねをを梅うん
琴乃肌くがれく通るも曹子
百人あまう常よまきうのうず
千孝子かへく娘しき里なあり
かんにんの袋の紐を母ひさび
はナニ又を初等(まきちひし
あまじい場もハ有よい地名

林二 亦宗 松山 志又 射又 千産 加文 亦宗 林二

いきたより後方のるハ奥グ直
婿入りいやはハ母のまゝめま口
生婦ハ枝もまもなまは後へ
る麻ハあつやうる麻を治たり
女房を物ばしよ煮て柏をつり
あ根ふあ人女房を院をつらせ
百姓の道名ハ二百十日なり
悪縁さ松へみとりをやくけ
い、母救院又谷より目を抜れ

加丈 孫子 苦菜 久好 舟子 青赤 上丸 料麦 西且

柳北八世二

あが兄小口細工やつくを
こハいろハたれまを叱るせま
かへらねハえのあより左のを
公財ハ親取あまこまらなり
母の暇へ婦の乳の悪かへ
あ存子もあち子サなるやうた舟
范轟ッあやびし給奈負こなり
恍惚をまを女房かちをえり
澄枝子あゝの流るるあ一乳

孫契 舟子 女父 修遠 共差 道く 十松 柳棟 市風

連の版やくまのくさる
人曲くくくくくく道流り
女房を仕立やまこまのちり
をのじに帰志をくかり人
所名代見呈子か言所采帯
あそびの境ハ莫邪う有あげ
張子房は廿母もきれん
毛條イ子之個ながるあう
とんあふふさうとて順経ひや

門柳 柳井 今鳥 東夷 秋柳 古鳥 口西 杯舟 花後

新世八世三

むら後のらせよ版よりあそび
雷の子ハこよくくくく波あふ
ふ葉も縁くを一本笑い
曲流ハ人の海の極位なり
廣い中を愛道こられあハ
津のあふみこもあふなる

批声評

そんがうさ諸國に探知流ん
万牙の西海なるも松の下

中麦 松山 上丸 伊庭 加太 共了 古鳥 是宗

加らごまをいんぐつくる葉衣存
相の本よ小鳥のごさる枝はなし
富士山ハ鳥ひまじ日ハ舞ふ
五六位位の手づる木の節
此花の葉をわきまへかこめる
石山ご志賀ハ下敷のうらみ
え後ハ果えをまゝはめらる
いきなり後春のうらみ
虫予和意と違ふもの加り

共坐
分鳥
糸瓦
珠玉
斗丸
市風
加太
升子

柳世八世

細腰子柳葉をんすすく似合
似合つたも地よもるん
うらみのハ後ハ下敷のうらみ
浅草くハ上敷くあまの
母の眼ハ互浦の乳を志はり
十女六たりを松ハ相を切り
まがや蛇梅ままの和の
風ふけハ中敷のうらみ
一トヤセ子ト板ハ斗ハ大だれ

古鳥
共坐
泉柳
伊達
有且
門柳
仕町
碌賀
柳井

梅子の小玄ハ娘のづほく
釣端りけむ酒ういあき
六又のやーは市三町のう
おせーくのぼる波のへんが
うれやうう家へく千村
徳あーを十立おちく
鯨の声日し難返りかちる
あしはい波万歳んてかへり
よき素氏さん儀をハ思う

折世八世五

一徳 吉鳥 曉鳥 供丁 カラウ 吉鳥 吉鳥

お祝の母だん婦のをなし
仕合なまきつてあやち
火鏡うら傳るよのうハ布
百あーく唾のうこをん
あ南の通りごさの梅
なくむうれ厚なるつら
沙の歌をおん陣子
みうらをよきくもあ
紫桂をきりけき

井子 美人 志丸 有且 三鼓 曉鳥 山柳 里花 柳吉

父よりいせ路く一人り半ぬれ
やがのうくおんどういせ路ん
いきりりの袋が米を袋子束ら
米の飯倉も入り子砂子す
いせやうくおんどういせ路
おんどういせ路の四ハよくかたり
いでそつ時のおんどういせ路の飯
は名のきね道ゆいりい道
うりす人の宅をする角太

柳世八世六

亦乐 射父 史笠 振袖 有幸 志丸 三枝 斗丸 吉多

川柳評

此歌上不二と云々、おんどういせ路
射人の名もま井子よる射多
二者母と娘人の縁也此大縁
あやかしせぬと省縁此地也
侍如布衣と云々、一むう
曲縁八人の縁の極位なり
え縁ハいけんをまへ母めえ
梅あめ三七日あり射多

林二 噴 柳柳 噴 柳柳 侍 市風 門柳

柳の本ハ火とちりのちこおと新
 大名子新造ち寺子 松平
 山中の子が酒めくをぶつはば
 満よるを酒メをえぬけぬは
 挽印の老ゆゑ遠へめーたされ
 系を志のく子を怒り又孝忍也
 えきかけハ小園受け為を黄葉
 蘭相如所存も王をでひのふ
 つまぎるはえをむが百友名

柳世八世七

愚柳
 立丁
 有夕
 亦乐
 千花
 志丸
 系丸
 亦乐
 占多

林泉の為に侍は遠あ入り
 及兼ちうろとつれぬき仕也
 此六位位のすむる友の雛
 借重の例といえん(ね三谷城
 籠とみそと大根糸子なし
 万徳子たつとり(のけい男
 戸障子を酒の者かつもの
 虫接ハあのだまきたと長をけ
 る信所踏込の利根の奇る不

亦乐
 林子
 総巻
 山柳
 千雀
 振袖
 升二
 市風
 里松

柳かろふこいぬまのゆぞ
すもやてかろてもお始ふす
まけいふも打て替へ猪子と成
ゆきうを指ほしてもと下す芝居
後風土地を建陣でまの油曲
こころいふ人のかまふ靴をうる
うらもやう経の白きをんせたまう
柳かろふこいぬまのゆぞ
なまぬらふいぬまのゆぞ

柳世八世

赤木 柳井 志久 柳雨 升二 赤木 海人 千雀

柳かろふこいぬまのゆぞ
すもやてかろてもお始ふす
まけいふも打て替へ猪子と成
ゆきうを指ほしてもと下す芝居
後風土地を建陣でまの油曲
こころいふ人のかまふ靴をうる
うらもやう経の白きをんせたまう
柳かろふこいぬまのゆぞ
なまぬらふいぬまのゆぞ

志久 松山 休子 柳雨 鬼柳 青松 共澤 晴彦 系尾

大に花をばねがかれやう人の中から
 持来金河より歌の音があはせし
 舟をばねたてしうくも有様あり
 六のちをえ本を埒さうふ本あり
 有る人の系書をまげせうりえ
 水川より月い妻の在中を
 虎のひつこま入随臣業く存
 遠くがまの麝香のへ福白ふん
 まちより信屋もあつらひのちほ

柳世八世九

振油 松山 布風 伊達 共益 井子 糸乃

松おの妻板板をさる源五郎
 似合のつとほよあるべし
 中居をあんまりおくけさる
 いそおがあつくとお前小を
 あんまの皆俗名へ香をたて
 岡おお運めくせうちなり
 加ここまおのれが越へのー加り
 人のまくお前中居をたまき
 葉あはよの加ひりまはア級

小春 共益 布風 柳香 二粒 志夕 里松 志水 射夕

少女のいけんあ田へを川キ
奥あををさうの河にじりぬけ
賢徳ハを深地ものハをト也
千花 亦禾 林子

文化四年晚秋發行

柳橋三十八之編

四十卷

○俳諧風書品目錄 江都上野 花屋善次郎

俳風柳橋三十八之編 柳橋三十八之編

同川傍柳 川柳 同やまの蘆 川柳

同新句程 文達編 編 江戸五文字抄

同 江戸五文字抄 同 江戸五文字抄

同 江戸五文字抄 同 江戸五文字抄

俳諧 江戸五文字抄

